

# UU ユー・ユー・ナウ now



OB. OG. INTERVIEW

常に可能性とチャンスがある

株式会社 JVCケンウッド 執行役員常務

落合 信夫

## CONTENTS

- 1 OB. OG. INTERVIEW
- 4 特集 「HANDSプロジェクト」
- 6 地域貢献REPORT
- 8 Welcome to 授業
- 9 Welcome to 研究室&ゼミ
- 10 研究keyword / 私の学生時代
- 12 UU News / サークル紹介
- 14 宇大生は今!
- 15 INFORMATION

# 常に可能性とチャンスがある

いまから40年前、「ものづくりの国」として日本がまさに世界に飛躍していった時代、宇都宮大学で工学を学ぶ学生として過ごした。新進気鋭の教授たちとの刺激的なふれあいのなかで、ものづくりの魅力を知り、世界とのつながりを意識するようになっていった。日本から海外へ、世界を舞台にもものづくりのキャリアは、ここから始まる。

(取材/工学研究科1年・高葉悠 工学部4年・木村理紗子)

## ものづくりの魅力を伝えたい

「開発して、製造し、商談をまとめてお客様に使っていただく。その一連の仕事ができることが最高の喜びです」。事業責任者として開発を手がけた最新鋭のカメラを前に笑顔を見せる。直接、米国に出向き、大きな商談を成立させた。「私にとって、このカメラは自分の子どものようなもの。彼ら(米国の放送局)は、この機械の素晴らしさを理解してくれました」。

横浜本社の技術者が開発し、製造はマレーシア。米国を中心に世界の報道現場で使われている。「そういう時代になったということです。これから、ものをつくる場所も、その中身も相当変わるでしょう。いろいろなものに対応できる力が大事になってきます」。



インタビュー後、本社展示スペースで記念撮影(左から木村、落合さん、高葉)

る国、民族であれば、ものづくりはできる、そう実感させられる。

日本の高度経済成長を牽引した京浜工業地帯に立地する生産技術研究所で、エンジニアの第一歩を踏み出した。以来、半導体、電子部品などの技術開発や生産技術の改善など国内外の生産拠点の革新に携わってきた。「ものづくりひと筋にこられたことは幸せですね。日本に限らずどの国であろうと、ものづくりを求めている人たちに、これまで積み重ねて



(株)JVCケンウッド本社(横浜市)にて落合さん(右)にインタビュー

界へ飛び込んで行くということとは、その国の生活習慣やものの考え方を知り、相手の立場を理解することです」。

60歳を前にして中国への赴任が決まり一から中国語を学び、20代の若者たちと一緒に検定試験も受けた。中国・深圳(しんせん)の現地工場では通訳を介さず自ら中国語でいさつした。何千人という社員がみな、大きな拍手で応えてくれた。

## 恩師に出会って

「学生時代は、格好よく言えば、これから発展していく日本の工業を支える一員になる、そんな夢をみんなが持っていました」。

日本経済が飛躍的な成長を続けていた時期に、大学時代を過ごした。全国に巨大工業地帯が整備され、大学周辺にも次々と工業団地が誕生していた。「工学部の学生が世の中

きたノウハウや、ものづくりの楽しさ大変さを伝えていきたい。そして自分も彼らから学びたいと思えます」。

## コミュニケーション力を支えた語学

ものづくりの変遷とともに、仕事の舞台は日本から世界に広がった。そのキャリアを支えたのが、語学を学ぶことで培われたコミュニケーション力だ。原点は大学時代にある。大学1年生後半のときだった。所属していたサッカー部を辞め、苦手だった英語の勉強を本格的に始めた。強い動機があったわけではない。「これからは世界中の人たちと付き合っていくことになる」。ただ漠然とした思いがあるだけだった。背中を押してくれたのが教授たちだった。



最新鋭のビデオカメラの説明を受けて実際にかついてみた

ら必要とされていることを実感できた。学生は全国から集まっていた。沖縄、九州、広島、大阪、静岡、東京、東北。全国の地方の話が聞けることが楽しかった。

後に宇都宮大学学長に就任する貴志浩三教授の研究室に所属。当時はまだ30代の若さあふれる情熱的な先生だった。学生にはいろいろなことをチャレンジさせてくれた。先生の



## プロフィール 落合 信夫【おちあい・のぶお】

1947年、宇都宮市生まれ。71年、宇都宮大学工学部機械工学科卒業。(株)東芝入社。74年、英国パーミンガム大学修士卒。92年、同社生産技術研究所メカトロニクス開発センター部長。95年、同生産技術研究所所長。97年、東芝本社生産技術推進部長、99年、東芝テック(株)生産本部長。07年、東芝テック深圳社代表取締役会長。10年、日本ビクター(株)取締役。11年、(株)JVCケンウッド執行役員常務 生産・調達部長。



大学4年時、貴志研究室の仲間と(左端が落合さん)

「狭い日本で働くことだけを考える。志を大きく持って、欧米に負けない人材になれば」と、教授たちの励ましがありませんでした。毎日、英字新聞を声を出して読む。分らない単語には印をつけた。日を追うごとに印の数は減っていた。社会人4年目のとき産業革命発祥の地、英国・パーミンガム大学大学院に留学し機械工学を学んだ。本場のサッカーを楽しめたこともよき思い出だ。

「言葉は、やはりコミュニケーションの人口です。外国の言葉を学び世を歩んでいかなくてはならない」。

学外活動で鹿島臨海工業地帯を見学したときのことを鮮明に覚えている。工場が立地する前の広大な敷地が広がっていた。「これからのいるるな企業が進出し、巨大な工業地帯が誕生する。そう想像するだけで楽しい気持ちになりました」。

「当時の学生は、将来、日本は必ず世界のものづくりの中核になると本気で思っていたのです。大学の仲間には、卒業後、活躍の場を求め全国に散った」。

「いま、日本は厳しい状態にあります。でも、これから何がどう変わっていくかわからない。自分たちの力で日本をよくするんだという気概を持って、いろいろなことに挑戦してもらいたい。学生には常に可能性とチャンスがあるはずですよ」。